

復刻版『台湾教育』【大正期】

全31巻・別冊1

体裁 Ⅱ A5判(第1・2、第19(31巻)・B5判(第3(18巻)

上製/総約17,000頁

揃定価 Ⅱ 本体702,000円+税

発行 Ⅱ 台湾教育会

収録年月 Ⅱ 大正2(1913)年1月(大正15(1926)年12月

収録号数 Ⅱ 第129号(第295号)

別冊 Ⅱ 総目次・索引(大正・昭和期)(CD-ROMデータベイス付き)

推薦 Ⅱ 陳雪玉・河原功・春山明哲・又吉盛清

原本提供 Ⅱ 國立臺灣圖書館、一般財団法人台湾協会、天理大学附属天理図書館

※明治期(第1号(第128号)はひるぎ社より復刻刊行済みである。

◆配本概要

※ISBNは頭に「978-4-8350-」がつきます。

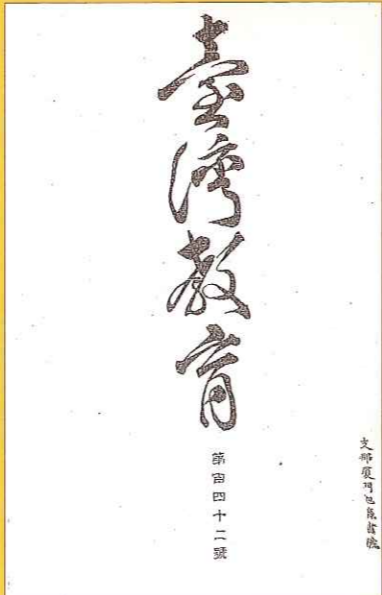
配本数	復刻版巻数	原本号数	原本発行年月日	配本 每本体価格	配本年月日 ISBN
第1回	第1巻 第2巻	第129 ~140号	大正2(1913)年1月 ~12月	42,000円	2014年 1月刊行 7574-7
第2回	第3巻 ~第6巻	第141 ~163号	大正3(1914)年1月 ~大正4(1915)年12月	92,000円	2014年 6月刊行 7577-8
第3回	第7巻 ~第10巻	第164 ~186号	大正5(1916)年1月 ~大正6(1917)年12月	92,000円	2014年 12月刊行 7582-2
第4回	第11巻 ~第14巻	第187 ~211号	大正7(1918)年1月 ~大正8(1919)年12月	92,000円	2015年 6月刊行 7587-7
第5回	第15巻 ~第18巻	第212 ~235号	大正9(1920)年1月 ~大正10(1921)年12月	92,000円	2015年 10月刊行 7592-1
第6回	第19巻 ~第22巻	第236 ~258号	大正11(1922)年1月 ~大正12(1923)年12月	84,000円	2016年 2月刊行 7597-6
第7回	第23巻 ~第26巻	第259 ~274号	大正13(1924)年1月 ~大正14(1925)年4月	84,000円	2016年 6月刊行 7602-7
第8回	第27巻 ~第31巻 別冊	第275 ~295号	大正14(1925)年5月~ 大正15(1926)年12月	124,000円	2016年 10月刊行 7607-2

日本統治下、ほぼ全期間に渡り刊行され続けた教育雑誌を復刻！
植民地・台湾における教育制度の実態を一目で知ることが出来る最も基本的な一級資料である。

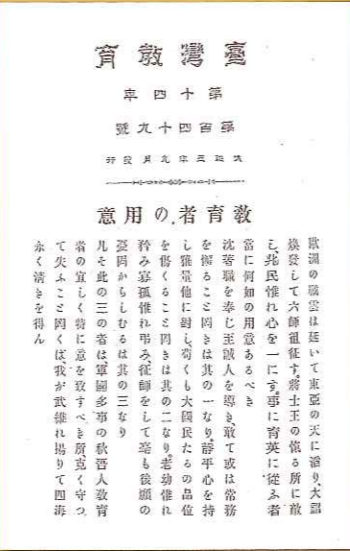


台湾教育会 Ⅱ 発行
復刻版
台湾教育 大正期
1913年(1926年)
全31巻・別冊1

- A5判・B5判/上製/総約17,000頁
- 揃定価 Ⅱ 本体702,000円+税
- 別冊 Ⅱ 総目次・索引(CD-ROMデータベイス付き)
- 収録号数 Ⅱ 第129号(第295号)
- 推薦 Ⅱ 陳雪玉・河原功・春山明哲・又吉盛清
- 原本提供 Ⅱ 國立臺灣圖書館、一般財団法人台湾協会、天理大学附属天理図書館



不二出版



不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替001600294084

表示価格はすべて税別

復刻の辞

『台湾教育』は植民地支配下台湾で刊行されていた教育雑誌である。刊行期間は継続前誌『国語研究会会報』『台湾教育会雑誌』を合わせると明治三三(一九〇〇)年から昭和一八(一九四三)年までおよび、日本統治期をほぼ網羅する。明治二八年(一九一五年)、下関条約によって清から台湾を割譲された日本政府は総督府を設置し、本格的な植民地支配を開始する。総督府は『台湾人』の「日本」への同化を図り皇民化教育を推進、初代学務部長に国語教育の方言矯正で著名な伊澤修二を任命するなど、日本語の実践的普及を図った。そうした流れを受けて、明治三一(一九一八)年に台湾人への日本語教授の方法を研究する団体として国語研究会(国語教授研究会)が結成された。翌年に同会は台湾教育会に発展し、日本語教育のみならず全教科の教授法を研究する団体となる。『台湾教育』はその台湾教育会から刊行された。内容は教育論説、教授法・教材の紹介、行事、総督府の公報などであるが、文芸、時事ニュース欄もあり、単なる機関誌に留まらない。時代を経るごとに比較対象として朝鮮・満洲での教育記事も散見される。また台湾人読者を意識して漢文による記事も収録されたが、これは昭和期に廃止された。

本誌明治期(第一号(第一二二八号))は既にひるぎ社より復刻版が刊行されている。今回弊社では大正期(第一二九号(第二九五号))から復刻する。大正期は田健治郎総督による「内地延長主義」政策が始まり、同化政策が強まる時期にあたる。昭和期の復刻も予定しており、台湾教育行政の空白を埋める第一級の資料であることは疑いない。教育史のみならず、広く植民地行政・文化史の研究者に提供する次第である。

推薦の辞

雑誌『台湾教育』について

陳雪玉 (國立臺灣圖書館館長)

臺灣圖書館は数多くの日治時期の貴重な史料と定期刊行物(新聞・雑誌)を所蔵しているが、そのうち雑誌『台湾教育』は日本の植民地教育政策と台湾近代教育史研究のための一次資料である。本誌の編集・発行の過程は、誌名の変化によって、おおよそ三段階に分けることができる。第一段階はわずかに一号だけ発行・停刊した『国語研究会会報』である。これは明治三三(一九〇〇)年五月に、明治三二年創立の国語研究会から発行された。国語研究会の創立の目的は「台湾人に対する国語教授の順序方法を研究すること」にあり、そのため教育と関係がある各種の問題、および国語に関係する教授法、教科、教材などの実務的課題が、全て『国語研究会会報』創刊号の討論の重点になっており、国語研究会創立以来数年の研究成果を見ることが出来る。『国語研究会会報』停刊後、研究会から発展・改称した台湾教育会が明治三四(一九〇一)年七月に『台湾教育会雑誌』を発行し、第二段階に入る。『台湾教育会雑誌』の内容は、論説、学術、実験調査、文芸、史伝、雑録、図書紹介、内外の報告、会報、公文書などの記事を含む。その他にも、質疑応答、地方通信、叙任辞令などの記事があったが、掲載の是非は編集部によって決められていた。そのうち、とりわけ「論説」欄は本誌の中心であった。『台湾教育会雑誌』はもと季刊であったが、第七号から月刊に変わる。また、明治三六(一九〇三)年一月の第一〇号から、約一七ページの漢文記事が新たに増加し、『台湾教育』に改名後も昭和三(一九二八)年の第三〇五号刊行時に廃止されるまで続いた。

『台湾教育会雑誌』は総計すると全一六号(一九〇一・七〜一九一・一)出版され、第一二七号(一九二二年一月)から『台湾教育』に改名する。『台湾教育』は台湾総督府初代学務部長で台湾教育会会長の伊澤修二が刊行の持続に尽力し、昭和一八年の停刊まで長く続いた。『国語研究会会報』『台湾教育会雑誌』『台湾教育』の刊行は合計すると四九八号に及ぶ。

『台湾教育会雑誌』は現在明治期(一〜二二八号)の復刻版がすでにあり、その他中島利郎・宋子紘編『台湾教育総目録・著者索引』(第一二四号〜四九七号、南天書局、二〇〇一年一〇月)がある。当館では本誌原本を所蔵するだけでなく、複製本・マイクロフィルム・全文デジタル化資料の三種の資料を読者の閲覧に供している。現在台湾の学者はこれらの資料を用いて、台湾近代教育史、制度史、学校史等の分野で大量の研究成果を蓄積しているだけでなく、社会的エリート層の教育養成、台湾生活史及び在台湾の日本人漢文学者等へと研究対象は広がっている。今回日本の不二出版が巨資をいとわず『台湾教育』(大正期)を復刻されること、私は感服の気持ちを持って深く表すとともに、新たな研究テーマの創出と研究レベルの向上に益するものと信じている。

歌 授 資 料

國民讀本中の唱歌並に曲譜
歌謡は何れも本邦の民衆生活の反映を以て、曲調は階級別で分類し、編者三條氏の作。今當局の承認を経て本誌に掲げ、後述の参考にする。四「センチ」に「た」及び「少」立派の曲調は既に本誌第三十回掲載せ

▲第一四一号(大正三年一月)

體育
學後院教授員自叙傳を以て、既に一年の準備する所を失ひ、久しく五里霧中を彷徨して迷途に入る状態を痛感し、我が身に於ける困難を、斯くて斯くて先づかき除くことを期し、はやくも第一期に入ることを期す。

小學校に於ける體操科に關して
總督府國語學校教授 櫻本秋治
體操科は、少くも體操科の歴史に於けるべからず、明治の初め、西洋文明の輸入時代から、我が國に於ける體操科の歴史は、比較的古く、我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。

致し、吾はこれを非として、改訂の途程を以て我が國の體操科に於けるべきもの、我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。

音樂

▲第一三〇号(大正二年一月)

式に於ては基礎が十分でない、非常の困難が増し、練習がいつも新教授となつてしまふ。これは、低学年に於ける算術練習、三四年には算算及板上算算を行はせ、(四)検査の程度を、練習を了して、尚時間余裕があれば、算算せよと

社會は一日も停滯するものに非ず、過去に記録を破り、將來に向つて進展するものなり。過去の記録は現在を將來の興件にして、現在は將來を現出する分子を包蔵す。故に現在を正當に理解し、將來に向つて發展の方策を立てんとするには、其の第一歩として、先づ過去の記録を精査せざる可からず。社會各層の事業に於て、歴史の記述が重要な一面の理由は、確かにここに存するなるべし。固より歴史の本質は、正確なる事實の記述で、

臺灣公學校 國語教授法小史
加藤 春城
其の興に横はれる事件の真相の闡明にあるべし。然れども、斯の如き科學的の歴史の編纂は、縦令そが二十年足らずの時間たり、其の關する所をたゞ社會現象の一面たる教育事業中の僅かに一部門たるにせよ、予にとりては到底不可能なる事業なり。予は現在教育の實際の方面に從事するものなれば、事の教育の實際に關する所なきものは、予が營部の事業とするの價値なし。

通俗教育
西岡 英夫
致し、吾はこれを非として、改訂の途程を以て我が國の體操科に於けるべきもの、我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。我が國の體操科の歴史は、我が國の歴史と共に進歩してきた。

▲第一三九号(大正二年一月)
▲第一四二号(大正三年二月)

▲第一五〇号(大正三年一月)

算術
表: 算術の練習問題とその解答。例: 30 + 20 = 50, 40 + 10 = 50, 50 + 10 = 60, 60 + 10 = 70, 70 + 10 = 80, 80 + 10 = 90, 90 + 10 = 100.

算術
表: 算術の練習問題とその解答。例: 100 - 30 = 70, 100 - 40 = 60, 100 - 50 = 50, 100 - 60 = 40, 100 - 70 = 30, 100 - 80 = 20, 100 - 90 = 10.

算術
表: 算術の練習問題とその解答。例: 20 + 30 = 50, 30 + 40 = 70, 40 + 50 = 90, 50 + 60 = 110, 60 + 70 = 130, 70 + 80 = 150, 80 + 90 = 170, 90 + 100 = 190.

算術
表: 算術の練習問題とその解答。例: 100 + 20 = 120, 100 + 30 = 130, 100 + 40 = 140, 100 + 50 = 150, 100 + 60 = 160, 100 + 70 = 170, 100 + 80 = 180, 100 + 90 = 190.

台湾教育全般の

研究・情報誌『台湾教育』

河原 功

(一般財団法人台湾協会理事/台湾文学研究者)

日本統治期台湾の初等教育は、日本人のための「小学校」、台湾人のための「公学校」、原住民のための「蕃人公学校」と分かれていた。当然、制度も内容も教科書もそれぞれ異なっていた。台湾人や原住民の日本語識字率を高め、日本精神の徹底をはかるために、教育現場での教員の負担や苦勞は計り知れないものがあった。

そして、一九一九年には「台湾教育令」が公布され、教育の向上と近代化に向けて新しい段階に入っていく。二二年には台北高等学校が、二八年には台北帝国大学が創設され、「日本内地」と等しく高等教育も充実していく。

日本統治期台湾でのそうした教育事情を知ることのできる第一級資料は『台湾教育』である。一九〇〇年五月に『国語研究会会報』として創刊されたが第一号だけで終り、組織変更で『台湾教育会雑誌』(一九〇一年七月創刊)となり、第一一七号(一九二二年一月)から『台湾教育』と改題され、一九四三年二月発行の第四九七号まで続いた。内容は、台湾教育界重要記事、口絵、講演、研究(制度、教授法、教科書、教材、学校行事、入学試験問題、入試結果、学級経営、規則改正)、雑録(追悼、芝山巖合祀者、表彰、回想)、彙報(地方通信、時事、叙任辞令、新刊紹介)、文芸(短歌、詩、童話、戯曲)、会員名簿、そして漢文欄(第三〇四号まで)等で構成されている。台湾教育全般の研究・情報誌として充実した内容である。

会員数は一九四二年には一万六〇〇〇名近くを数え、『台湾教育』は総督府系列の雑誌として最大の発行部数となる。だが、今日この『台湾教育』を所蔵する図書館等は極めて少ない。明治期『台湾教育会雑誌』は復刻版(ひるぎ社、一九九四～一九九五年)で目にする事ができるものの、日本が台湾統治していた三分の一の期間でしかない。

したがって、このたび待望の大正期・昭和期が復刻されることになったことは実に喜ぶべきことである。植民地教育、台湾史、日本近代史等の研究を大きく前進させることになろう。

新たな学術研究インフラとメディア史の情報源

『台湾教育』大正期コレクションに期待する

春山明哲

(早稲田大学台湾研究所 客員上級研究員)

『台湾教育』は、明治三四(一九〇一)年から昭和二八(一九四三)年まで、すなわち日本統治下の植民地台湾でほぼその全期間にわたって刊行された雑誌であり、教育史研究者にとってもっとも基本的な文献資料として広く知られている。しかし、月刊雑誌としての刊行形態から、歴史の長い図書館であっても、その完全なコレクションを所蔵しているところはない。また、その復刻版の刊行もこれまで明治期に限られていた。今回の大正期の復刻版の企画は、学術研究のインフラとして、大きな意義を有するものである。

大正期の台湾教育は、原敬内閣・田健治郎台湾総督の推進する「内地延長主義」の統治政策のもと、新台湾教育令による同化主義的教育政策へと、教育政策が大きく転換する時期にあたる。総督府の政策遂行メディアであり、教育現場の調査研究誌でもある、という二つの性格・機能を併せ持つ『台湾教育』という雑誌は、この大正期の教育改革をよく映す鏡ともなっている。また、この雑誌は教育論壇・広場でもあって、台湾のみならず、朝鮮・満洲・内地など、植民地帝国日本の教育状況を反映する記事も少なくない。

台湾教育史・統治政策史の研究にはもちろんのこと、帝国日本の言語・文化・社会の研究にも裨益するコレクションとして、さらには雑誌・メディア史に関する情報源として、関係各界に推薦する所以である。今回の大正期に続く昭和期の刊行も期待される。

アジアを生きる

日本国民の必読の資料

又吉盛清

(沖縄大学客員教授)

五〇年余にわたって日本の植民地地下にあった台湾で、日本帝国が推進した同化・皇民化の理論・実践教育の指南役を果たした『台湾教育』(大正期)の復刻版が完成した。世界的な植民地史・教育史の解明にとっても画期的なことである。

今日の日本国は、アジアとの関わりで政治経済、産業流通、歴史文化、人の往来など多面的になったが、侵略戦争、植民地支配などの歴史認識の問題が大きく浮上して、かつての植民地支配の実態をよく知り、自省して誠実に向き合うことが国民的に求められているのだ。『台湾教育』の復刻は、時宜を得て待ち望まれていたものである。

近代日本帝国の植民地支配の特色は、一貫した同化・皇民化の教育政策であった。それは北海道のアイヌから沖縄を経て、台湾・朝鮮・中国(旧満州国)・南洋群島・東南アジアをつなぎ、世界に冠たる植民地支配の制覇を計ったのである。

その中でも沖縄と台湾は、植民地支配の先駆を遂げる「実験場・学校」となって「加害」と「被害」を共にする「運命共同体」的な関係性を強いられてきた。『台湾教育』は、台湾植民地時代の諸相のほとんどをカバーし、もう一つの日本近代史の「空白の歴史」を解明するものでもある。

あなたの住む都道府県の市町村から、台湾植民地支配下へ渡台した人々の動機はなんですか。教育関係者の果たした役割は何でしたか。生活の実態はどうでしたか。台湾人・原住民にどのように対応していましたか。知っていますか、知りませんか。

アジアを生きる日本国民の歴史認識・思想性・価値観・責任が今ほど日本帝国の侵略戦争・植民地支配を通して大きく問われている時はないのである。

臺灣教育 第百三十五號

△本 棚▽

◎地方官會議終了内田民政長官閣下の訓示要領(一)

◎當日に於ける内田民政長官閣下の訓示要領(二)

△講 演▽

◎朝鮮の學校

◎結核の豫防に就いて

◎研究調査

◎研究授業記録

◎理科教授用品の購入に就いて

◎公學校理科教授用品標準目録

◎史 傳▽

◎臺灣龍鱗一片

△教授資料▽

◎本島重要物産の通商地

△通信彙報▽

◎臺北通信◎國語學校通信◎成廣源通信◎里壩通信◎講習會一東◎新著紹介

△叙任辭令▽

◎任命◎轉免◎昇給

△會 報▽

◎會員獎勵◎新著寄贈雜誌◎會費徵收

△附録公文▽

◎總督府學校用圖書下規則取捨手續◎總督府出版學校用圖書下規則◎總督府出版學校用圖書下圖書及定價◎三十二年告示第一二一號廢止ノ件

臺灣教育 第百三十五號

漢文目録

◎明治天皇聖諭

◎就夏季休暇而言

◎漢文讀本卷六應用文集

◎乃木大將小傳(四)

◎臺灣山岳諸島神話

◎始政記念日書感

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎追悼六氏先生

◎同 上

◎嶺南學規所感

◎遊指南宮

◎春日感懷集古

◎端午懷古

◎貧 居

◎清明日祭掃先父之墳有感

◎清明日山行

◎席上賦贈許天奎君

◎哀悼祖母

△通 信▽

◎臺北通信

◎宜蘭通信

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

◎同 上

神武天皇

神武天皇爲人皇第一代天皇 御名神武天皇 御名神武天皇 御名神武天皇...

第一三三號 (大正二年五月)

漢文記事

第一四九號 (大正三年九月)

宣戰の詔書を拜す

宣戰の詔書を拜す 宣戰の詔書を拜す 宣戰の詔書を拜す...

時事

叙任辞令

Table with columns for names, titles, and dates. Includes names like 元田 晴, 三井 竹月, etc.

第一三〇號 (大正二年二月)

第一四四號 (大正三年四月)

文化

霜枯の霞は白う澄暮れて... 霜枯の霞は白う澄暮れて... 霜枯の霞は白う澄暮れて...

関連図書

台湾出版警察報

台湾總督府警務局保安課圖書掛 編(昭和5年、昭和7年刊) 全5巻・別冊1

旧外地「工場名簿」集成

解説(堀和生) 付き A5判、A4判、B4判・上製・総約6,500頁

上海新報

解説(高綱博文)・総目次付き A4判・上製・総約800頁

沖繩教育

沖繩県教育会/沖繩教育会発行(明治39年、昭和19年) 全38巻・別冊1

台湾引揚者関係資料集

解説(河原功) 付き B4判、A5判(付録)・上製・総約2,500頁

